

〔北総文化研究センターから〕

公開講座報告

愛国学園大学主催の平成22年度の公開講座は、平成22年9月から10月にかけての土曜日に本学を会場に開催された。毎回約50名の市民の方々の参加があり、好評であった。

各回毎に講義後アンケートを実施し講義内容に関する受講者の感想や意見を集めた。講義内容に関する評価はいずれの回も高い評価であった。自由意見の内容では公開講座に対する期待が大きく、継続的な開催を望む意見が多かった。

本年度の公開講座テーマを「異文化を考える」とし関連テーマで5回にわたり開催した。グローバル化が進む今日、個々の国や文化を理解することの重要性はますます増しており中でも古典的な文芸作品や美術はその地域の人や文化を理解する際にひとつの大切な手がかりを与えてくれている。本公開講座は、日本及び世界の様々な地域の文芸を題材に取りあげ、異文化への理解を深める内容とした。

平成22年度公開講座「異文化を考える」

回	月 日	テ ー マ	講 師
第1回	9月25日	平安歌謡集『梁塵秘抄』の世界－遊女・傀儡（くぐつ）の芸能－	宇津木言行
第2回	10月 2日	カンボジアの民話にみる人々の知恵	高橋 美和
第3回	10月 9日	英語HAIKU－文化の逆輸入－	伏見 親子
第4回	10月16日	ギリシア神話の世界を絵画で楽しむ	堀川 麗子
第5回	10月23日	ゲーテと異文化理解－そのオリエント理解のありようをめぐって－	鈴木 邦武

※時間はいずれも10:00～12:00

第1回 「平安歌謡集『梁塵秘抄』の世界－遊女・傀儡（くぐつ）の芸能－」

1. 開催日 2010年9月25日
2. 講師 宇津木 言行 教授
3. 講義概要

12世紀の京都を中心に流行し、「今様（いまよう）」と呼ばれた歌謡を後白河法皇が編纂した『梁塵秘抄』の世界を開いてみた。今様の歌い手だった遊女・傀儡（くぐつ）という女性に注目し、その芸能の特色を探った。公開講座テーマ「異文化を考える」との関連でいうと、文化の周縁部に活動した女性芸能者に注目し、いわば日本文化の内なる異文化を考える立場に立ってみた。江戸時代の遊女とは異なり、自立した職業的芸能者だった中世の遊女・傀儡が、その自由な生き方の中から生み出した表現を読み解き、文学と宗教が不思議に調和した中世文芸のあり方、また和歌とは異なる歌謡のことばの魅力を考えた。

遊女と傀儡では、その活動領域を遊女は水辺、傀儡は陸地に置いた点が異なっている。そのことをまず遊女に関して、「遊女の好むもの、雑芸鼓小端舟、簗翳鱸取女、男の愛祈る百太夫」という歌謡を例に、『法然上人絵伝』の小端舟に乗ってそれぞれ鼓を打ちながら雑芸（歌謡を中心とする芸能）を歌い、簗を翳し、鱸舵を取る三人の遊女を描いた場面と比較して、当時の遊女が淀川河口などを主な活動場所にしてきたこと、その一つが有名な江口の里だったことを説いた。一方、傀儡については法輪寺へ参詣する道筋を歌った道行きの歌謡にその存在を匂わせる一節のあることを例示し、平安京郊外の大寺社の周辺に傀儡

の活動拠点があったこと、それは寺社参詣する遊客の精進落しの遊興の需要に応じた存在形態であったことを明らかにした。

本講義ではとくに傀儡の芸能歌謡に焦点を絞った。不実な男への非難を込めた内容の二首を取り上げて、それらが芸能として歌われた歌謡であることを述べた。「歳粧狩場の小屋習ひ、しばしは立てたれ寝屋の外に、懲らしめよ、宵のほど、昨夜も昨夜も夜離れしき、悔過はしたりともしたりとも、目な見せそ」という歌謡は狩猟民を起源とする部族という説が有力な傀儡の女の小屋掛けの営業形態に合致する内容である。連夜通ってこなかった男の言い訳を表すのに「悔過（けか）」という寺院の行事に関係することばを用いていることに注意し、それが音読みの語であり、訓読みの大和ことばを基本とする和歌の語彙とは異なる魅力を発散していることも指摘した。

それと並んで配列される「われを頼めて来ぬ男、角三つ生ひたる鬼になれ、さて人に疎まれよ、霜雪霰降る水田の鳥となれ、さて足冷たかれ、池の浮草となりねかし、と揺りかう揺り揺られ歩け」という歌謡は不実な男を思い切り罵る内容で女性に人気のある一首だが、前歌と共通する傀儡の芸能歌謡と考えられる。罵倒語の羅列の中に出て来る「角三つ生ひたる鬼」に注目した。従来の注釈的研究ではこの三角鬼の正体が不明とされていた。普通は鬼の角は一本か二本なのに三本とは醜さを誇張したとか、憎さのあまり一本おまけしたとかの憶測にもとづく注解が加えられていたに過ぎない。しかしそれは鬼が本来不可視のもので、ほかならぬ12世紀段階によく可視化され、形を備えてきたことに無頓

着な注解である。私たちが鬼の定型と受け止めている一角鬼・二角鬼は後世になって形が定まったものである。法隆寺西円堂の「追儼（ついな）」（鬼やらい）に用いられた鎌倉初期に遡るといわれる鬼面に三角鬼があることを紹介した。12世紀の追儼に登場して人々にののしられ打たれた三角鬼が、寺社と関係深い傀儡によって歌われた可能性が十分に考えられる。

また水木しげるが中国の妖怪として二度にわたって三角鬼を描いていることを紹介した。水木の妖怪画にはほとんどネタがあるといわれるが、このネタの出所はまだ一般に知られていないようである。もし分れば『梁塵秘抄』の歌謡のことばの謎が解けるかもしれないことを注意し、諸事万般を歌った今様にはまだ読み解けていないことばがあり、場合によっては研究者以外の一般の方たちにもその謎に迫る機会があるかもしれないことを述べて結びとした。

第2回 「カンボジアの民話にみる人々の知恵」

1. 開催日 2010年10月2日
2. 講師 高橋 美和 教授
3. 講義概要

民話とは、神話・昔話・伝説・世間話などの総称であり、本質的には口承説話である。その土地で代々受け継がれてきた民話はそこに住む人々のものの考え方が色濃く反映された文化そのものとも言える。

カンボジアの民話は、フランス植民地時代である1921年から採集・編纂がなされ、1959年～1971年にかけて出版された『クメ

ル民話集』全9巻（全248話）が唯一まとまった民話集である。（クメールとは、カンボジアの多数派民族の名称。）この民話集から、あらすじとしては以下の6話を取りあげた。①義父の婿選び、②蛇毒を消す薬を作れる男の話、③目の見えない男と足の悪い男の話、④女の世渡り、⑤プノンペンの話、⑥ボンチョール・ムロップ（＝直訳すると「日陰に入れる」の意で、初潮儀礼のこと）がなぜ始まったかについての話。

カンボジアの地理や風俗習慣を理解する上で興味深いのは由来譚である（民話⑤⑥）。また逆に、カンボジアでは結婚に際し婿が嫁の両親と同居する妻方居住婚がその逆よりも一般的であることを知らないという理解が難しい民話①のようなものもある。

民話に登場する擬人化された動物たちは、それぞれ典型的な性質を持つことが多い。例えば、トラは人々に恐れられているが愚かであり、ワニやヘビは恩を仇でかえす。一方、ウサギは賢く、特に「ウサギの裁判官」が登場する話が多く、他の動物や人間をその知恵で助けてくれる（民話②）。

民話の舞台は大きく分けて「プレイ（＝森）」と「スロック（＝村、里）」とがあり、その両者を行き来する話もある。かつてのカンボジアは森におおわれた国であった。スロックが人間の住む秩序のある空間であるのに対し、プレイの方は野生動物や盗賊・山賊などの無法者が跋扈する空間として描かれ、カンボジア人の世界観がうかがえる。

他国の民話と同様、カンボジアの民話にも、倫理や人生訓、処世術といったものが隠れた主題となっているものが多い。『クメール民話集』では、そういった話には内容にふさわ

しい格言や諺が編纂者によって付記されている。善には善の、悪には悪の報いがある、といった話は日本とも共通しているが、カンボジアの方は「長い物には巻かれろ」「強者は常に強者」「お人好しすぎると損をする（民話②）」「(悪) 賢い者は常に大きな幸せをもたらすように身を処する（民話④）」といった非常に現実的な処世術を説くものも目立つ。一方で、小さくて弱い者が、強いとされる者に、あるいは社会的地位が低いものが地位が高くいばっている者に知恵で打ち勝つという話もかなり多い（民話③）。

古代よりインド文明の影響を強く受けたため、カンボジアの民話の一部には、例えば、インドの神々が登場する。また、カンボジアと日本とで筋が酷似している民話が散見されるが、そうしたものは古代インドの説話集『パンチャタントラ』他が両国に伝わった結果であることがわかっている。

4. 講義を終えて

個々の民話をじっくりと味わうことは時間的制約のため断念し、そのかわり、複数のあらすじ紹介という方法を取ったが、中盤以降はかなり駆け足になってしまった。民話④のような不倫あり殺人ありのかなり「生臭い話」に驚かれた方々もあったようだが、全体としては、異文化と自文化の相違と類似とを楽しんでいただけたのではないか。

カンボジア旅行の経験者も数名おられたが、その時の印象と今回の民話の世界とを繋げてまた新たな発見をしていただけたと思う。また、カンボジアに今まで興味がなかった方々にとっては、民話を通してカンボジア人のものの見方に初めてふれていただいた。民話に描かれる風俗習慣のみならず、植民地

時代と内戦を経たカンボジアの近・現代史、さらには国民性などにも関心を広げた方々からそういった方面の質問を受けたことは望外の喜びであった。

第3回 「英語HAIKU—文化の逆輸入」

1. 開催日 2010年10月9日
2. 講師 伏見 親子 教授
3. 講義概要

本講座では、まず簡単に英語HAIKUの歴史を辿り、次に日本の俳句との違いと制作方法を講義した。続けてHAIKU作品を鑑賞した後、ワークシートを使って受講生にHAIKUを創作してもらい質疑の時間を受講生の作品の発表と添削に充てた。

(1) 英語HAIKUの歴史

1) 海外への俳句紹介と俳句が与えた影響

慶長8年(1603) イエズ会刊行の日葡辞書に俳諧、発句、連歌の記述が見られ、文化文政年間にはオランダ人ヘンドリック・ズーフら外国人による日本語の俳句が作られた。

明治時代になって野口米次郎『日本詩歌論』(1915) 宮森麻太郎『古今俳句集』(1932) 等の俳句の翻訳が国内出版され、海外へはW. G.アストン『日本文学史』(1898)、ラフカディオ・ハーン『靈的日本』(1899) 等によって紹介された。

1910年代に入ると、海外に紹介された俳句はイマジスト詩人エズラ・パウンドらの詩に影響を与え、技法が彼

等の詩に取り込まれるようになった。

2) 英語HAIKUの成立と普及

第二次世界大戦前～戦後には、R. H. ブライスの『俳句の歴史』(1964)、ケネス・ヤスタの『日本の俳句』(1957)、ハロルド・G・ヘンダーソンの『俳句入門』(1958)等によって広く海外に俳句の技法が紹介された。特にブライスは俳句を歳時記として分類、季語の意味を海外の読者に伝えた。彼の『俳句』(1949-1952)全4巻は、世界の俳句作家の教本的存在である。

現在、HAIKUは英国、ヨーロッパ(バルカン諸国も)、北米、アジア等世界各地に普及している。

3) 英語HAIKU日本に逆輸入

日本最大の国際俳句協会である国際俳句交流協会(1989)、世界俳句協会(2001)等が設立された。世界各国語を尊重しつつも、共通言語として英語を使用する。

英語教材としても教科書に登場し、英字雑誌や新聞にも英語HAIKU欄がある。

(2) 英語HAIKU

1) 英語HAIKUを創作するに当たって

- ①日本詩と英詩に共通の感覚または感覚の違いを楽しむ。
- ②自分の感性を英語で伝える。
- ③英語の音のまとまり(syllable)をとらえ、リズムを楽しむ。
- ④俳句を作ってから英語に変える、または最初から英語で作っていく。
- ⑤英語と日本語の言葉の違いに注意する。

⑥出版または公表する場合は、英語を母国語とする人によるチェックを必ず行う。

⑦Webサイトに投稿する場合は、そのルールをよく読んでそれを守り、他人の句や、宗教問題など民族・国際間の論争になるような句の投稿は控える。

⑧また、送信する場合はテキスト形式にする。

2) 英語HAIKUの作り方

①音節(syllable)

あまり拘泥しなくても良いという前提で、原則は5-7-5の17音節以内。

②行数

各々の詩に沿ったものではあるが、原則は3行または1行とする。

③文字

最初から最後まで小文字でピリオドを打たないのが、現在の主流。

④句読点

1. 無駄な句読点は省く。
2. 俳句の切れ字(や、かな、けり)を表すために、コロン: セミコロン; コンマ, ダッシュー 感嘆符! を代用する。

⑤時制

原則として現在、現在進行時制を用いる。

⑥季語

1. 原則としてそれぞれの国の季節を表す語を入れる。(地域的多様性)
2. 季語に拘らず、キーワードに重点を置くHAIKUもある。

(3) 作品鑑賞（説明）とHAIKU創作

受講生は非常に熱心に課題に取り組み、質問も多かった。定時に一旦終了したが、希望者には時間を30分延長して作品の添削を続けた。

第4回 「ギリシア神話の世界を絵画で楽しむ」

1. 開催日 2010年10月16日
2. 講師 堀川 麗子 講師
3. 講義概要

ギリシア神話は、キリスト教の聖書と並んで西洋文化の根底をなす重要な主題である。それは様々な分野でこの神話に由来する語（花の名前や心理学用語など）が数多く用いられていることから窺える。絵画の領域でもルネサンス期に古代ギリシア・ローマ文化の再評価がなされて以降中心的主題の一つとなり、その後アカデミーが確立した絵画ジャンルのヒエラルキーの中で「歴史画」に属するものとして最高位に置かれ、19世紀までその地位を保ち続けた。

ギリシア神話のテキストとして多くの画家が典拠としたのが、古代ローマ詩人オウィディウスの『変身物語』である。この一見風変わりな題名は、ギリシア神話で「変身」という要素が重要な役割を果たしていることを示す。ギリシアの神々は自在に姿を変えることができ（最高神ゼウスは白鳥や牡牛といった動物のみならず雲や雨にまで姿を変えて人間と交わる）、また神への不敬の罰として人間を変身させることもある。

画家は、言語で表わされた物語を画面にどのように視覚化するか、すなわち構図に腐心する。絵画作品の鑑賞は、過去の画家たちが

作り上げてきた伝統やルールが作品でどう扱われているか、また、時代の趣味や画家自身の創意工夫がどう反映されているかに着目することで一層興味深くなる。ここでは『変身物語』から二つの物語を取り上げ、絵画化された作例の比較を行う。

エコーとナルキッソスの物語は、こだま(echo)、自己愛(narcissism)、水仙(narcissus)の起源を含む物語である。ニンフのエコーは、ゼウスの浮気的一端を担ったため、その妻ヘラから相手の語尾を繰り返す以外話せなくなるという罰を受ける。その後美少年ナルキッソスに恋するも冷たく拒否され、悲しみから体が消え声だけになる。復讐の女神によって自分に恋することを強いられたナルキッソスは、水面に映る自らの姿に恋い焦がれ、報われない思いに憔悴し息絶える。亡骸はやがて水仙の花に変わった。

絵画では水面に映る自分の姿を見つめるナルキッソスの姿が最も多く描かれる。その際ブッサン（ルーヴル美術館蔵）やウォーターハウス（ウォーカー・アート・ギャラリー蔵）の作品に見られるように、通常失恋したエコーも一緒に描かれる。前者は他人を寄せ付けまいと背を向けるナルキッソスのポーズと悲しげなエコーの表情によって、後者は河で隔てられた位置関係によって、二人の心理的な距離を巧みに描き出している。また、カラヴァッジョの作品（ローマ国立美術館蔵）のように水面に見入るナルキッソスだけをクローズアップした作例も見られ、上下に対峙した緊張感ある構図はナルキッソスの張りつめた思いを表現しているようでもある。

アポロンとダフネの物語では、静的なナルキッソスの物語と対照的に激しい動きと変化

が示される。太陽神アポロンは、愛の神クビドの仕返しに金の矢を射られ、河神の娘ダフネに抑えがたい恋心を抱く。鉛の矢を射られた男嫌いのダフネは、アポロンの執拗なアプローチから逃れようとするが、ついに追いつかれ、捕まる瞬間の祈りから月桂樹へと変身する。

絵画では、追うアポロンと逃げるダフネという動的な場面、または樹木へ変身する瞬間が扱われる。特に人間から樹木への変身というモチーフは画家の想像力を大いに刺激したに違いない。体のどの部位から変身したかテキストに記述がないため、過去の作品を参考にする画家がいると同時に、工夫を凝らして独自の表現を試みる画家も多く、その比較は興味を引く。例えば、ポライウォーロの作品（ロンドン、ナショナル・ギャラリー蔵）では肩から上が巨大な葉群を伴う枝に変わっている。一方、地面に張り付くように足元から変身させる画家もあり、その代表としてシャセリオー（ルーヴル美術館蔵）が挙げられる。また、胸から上を樹木、下半身を人間として表現したピサンの挿絵（大英図書館蔵）は形態の特異さが際立つ作例であり、その着想の独創性に驚かされる。

第5回 「ゲーテと異文化理解 —そのオリエント理解の ありようをめぐる—」

1. 開催日 2010年10月23日
2. 講師 鈴木 邦武 教授
3. 講義概要

(1) ゲーテの生地がフランクフルト・アム・マインであることから、ヨーロッパ

の地図を用いてフランクフルトがヨーロッパの、また、ドイツのどの辺りにあるかを示した後で、彼の生家が現在はゲーテ博物館となって一般に公開されていることを紹介し、それが第2次世界大戦で破壊された後で以前と同じ形で修復されていることを説明し、ドイツにおいては多くの都市の中心地で第2次世界大戦中に破壊された建物が破壊される前と同じ形で修復されていることなどを紹介した。

- (2) また、彼が生まれたのが1749年で、亡くなったのが1832年であることから、その間におけるヨーロッパの状況を紹介するために簡単な年表を作成して主な事件やその当時活躍したヨーロッパの主な人物の紹介を行った。なおその際、その時期が日本のどのような時代であったのかについても触れた。
- (3) ゲーテは、1773年に『鉄手のゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン』を、1774年には『若きヴェルターの悩み』を発表し、ヨーロッパにその名を知られるようになるが、そのゲーテに関心を抱いたヴァイマルの公子カール・アウグストからの招聴を受けてヴァイマル公国に赴き、そこで彼は、カール・アウグストを助けて政治的事柄にも参画しながら、その後生涯に渡ってヴァイマルで過ごすことになる。以上、彼の生涯について簡単に紹介した。
- (4) ゲーテは、晩年に中世ペルシア詩人ハーフィズの詩のドイツ語訳を日にする機会を持ち、そのハーフィズに強く意かれてゆき、ハーフィズと競い合うような

気持で詩を作り始める。その事との関連で、中世ペルシアの詩人ハーフィズについて、日本語訳『ハーフィズ詩集』などにより、解説を行った。また、『ハーフィズ詩集』をドイツ語に翻訳したオーストリアの外交官ハマー・ブルクシュタルについても紹介した。

- (5) ゲーテは、この時期、1814年と1815年に、郷里フランクフルトに旅をするが、その時『ハーフィズ詩集』を携行し、これを読みながら詩作を続けて行く。同時に、この旅行の際に幼馴染の友人で、フランクフルトの銀行家であったヤーコプ・ヴィレマーを訪れ、そこでヴィレマーと再婚したばかりの彼の若い妻マリアンネと知り合い、ゲーテとマリアンネは互いに心を惹かれ合うことになる。ゲーテはマリアンネへの思いも詩の中に込めて

いく。ハーフィズに対する畏敬の気持とマリアンネに対する愛の気持を織り込むようにして作り上げた詩が中心になって出来上がったものが『西東詩集』であるが、ゲーテはマリアンネとの愛をオブラートに包むように出来るだけこの詩集をオリエント風に仕上げていく。同時に、そのようにしてオリエント的色彩を込めて仕上げたこの詩集がドイツの読者に受け入れ易くするための配慮もする。そのために、この詩集には、「西東詩集のよりよき理解のための注と論考」と題する解説が加えられる。この解説の作成のためにゲーテは当時ヴァイマルで入手可能なオリエント関連の文献の殆どに目を通し、周囲のオリエント学者に教示を求めてオリエント世界の理解に努めている。以上のようなことを説明した。